

ゆうかり放送委員会提供

ゆうかりに乾杯

第 145 回放送の概要 (2019 年 5 月 25 日放送)

| |
|----------------|
| パーソナリティ |
| たろう (佃 由晃) |
| なか (中嶋邦弘) |
| くらら (河野真紀) |
| あこ (村上明貴子) |



| |
|----------------|
| ミキサー |
| 門ちゃん (門田成延) |
| かりん (妹尾優香) |
| 会計 |
| 小山俊則 |
| 相談役 |
| わだかん (和田幹司) |

1. ゲストコーナー (1) 一般社団法人 ひととまちサポート代表理事 越智和子さん

越智さんは、現在「一般社団法人ひととまちサポート」の、垂水区にある「和みの海(かい)」という障害者の就労継続支援 B 型の福祉事業所(昔は作業所と言っていた)を運営している。しかし福祉関係の仕事は始めて 7 年ほどの新参者です。

20 代の頃から編集の仕事をしており、朝日新聞の地域情報誌「あさひ GF (GreenFamily)」の編集者からスタートした。その会社は、広告、イベントも手掛け、50 歳まで勤めた。広告関係では色々な企業、社長さんなど多くの方と知り合い、取材では街中をウロウロし、いまだに散歩が大好きである。

阪神大震災発生時は垂水の自宅で就寝中で、その日は月 1 回の編集の締め切り日(前日?)で、そのことしか頭にはなかった。大地震が発生したことだけで周りの状況が全く分からない中、社長への電話がやっとつながり、今日が締め切りなんでどうしようと言うと、それどころではないと言われたところからスタートした。垂水地域はライフラインは絶たれたが被害は大きくなく、自宅 2 階の一部を開放し自転車の使える社員は越智さんの自宅に 1 か月程通勤した。まずクライアントの安否確認から始まり、少し落ち着いたころ、車を運転中きれいに咲いていた 1 本の桜を見た時に車中で号泣した。それまでは必死で、そのような状態の時は人間は泣けないが、その時のきれいな桜とそれまでの苦勞、街中のガレキとのギャップを忘れることはない。

以前の会社で社長もしたが大病になったこともあり、初めて人生で立ち止まり、このまま忙しい状態で死んでいくのかと思い、これまで培った経験、キャリアを少しでも社会貢献でお役にたちながら生きていけないかと考え、50 才で同じ出版業で独立した。出版しながら福祉につながることを、神戸ユニバ

ーサル研究会に顔を出すようになり、また取材で福祉関係に行くこともあり知り合いも増え、福祉に進む道が出来上がって行った。NPO 法人 WING から障害者が作る障害者向けフリーペーパー、ユニバーサル情報誌「ひと」をつくりたいという話が入ってきて、創刊に携わり 1 年間編集長として手伝いをする事になった。取材先の選び方、アポイントのとり方、取材の仕方、カメラの撮り方などを障害者の方と一緒に取り組んだ。障害のある方と 1 年間接することになったことが、今の事業につながっている。WING は障害者の旅行の手伝いもしている。独立して作った会社は（株）未来共創で、高齢化社会に役立つこととして、司法書士や葬儀屋さんによる、遺産相続、家族葬などに関する疑問点のワンコインセミナーを開催した。一般の人は株式会社は金もうけではないか、勧誘されるのではと警戒されている雰囲気を感じ、今後の活動を考えると営利ではなく非営利のものを作っていく必要があると考え、一般社団法人 ひととまちサポートを設立した。

今の仕事を始めようとしてきっかけは、知り合った人たちが福祉に取り組んでいたこと、垂水は障害者の働き場所が当時はまだ少ないこと、仕事場所の事務所 1 階に倉庫的に使っている場所があり、そこが作業場所として使えるのではと言われたことなどから始めることになった。

ひととまちサポートの施設利用者は、知的障害、身体障害、精神障害が中心で障害手帳のある人を対象にしている。サービス受給者証を取得できれば障害ではなくても通所出来るよう制度が変わってきている。障害者の就労支援には雇用の A 型と非雇用の B 型があり、ひととまちサポートは後者である。B 型に出来る方を社会に向けて訓練し、毎日できる又は生産能力があると判断される場合は A 型に進み、社会に復帰していく。B 型ですっと続ける人もいる。A 型は雇用型であるため最低賃金が発生するので、それなりの仕事がないと A 型の事業所は運営が難しいので B 型を選んでいる。通所してもらうためには、未成年者や自分の意見判断が難しい知的障害のある人は保護者同伴でモニタリング（面談）し、支援計画書を作り、希望も聞きながらどのように頑張っていくのかについても話をする。

開所するにはスペース、非常口他、資格者の最低人数など行政の多くの基準に従う必要があり、資格者としてはサービス管理責任者は募集し、編集職員と越智さんの娘さんはヘルパー 2 級の資格をすぐに取得し、またパートさんなどには福祉経験者がたくさんいる。

施設名称の「和みの海（かい）」は、越智和子の名前からとったものではなく、独立してから企業のプロデュースをしたり広告のプロモーションなどをする時に、社名は思いのある依頼者に決めてもらうのだが、最初の依頼者が偶然「和み」をつけてきた。プロデュースした次の依頼者も「和み」をつけてきた。偶然が 2 つ続いたことから自分が何か始める時には「和み」をつけようと思った。「和みの海」は「和みの会」をイメージしたが海が近いので「海」を当て「かい」と読むようにした。利用者数は普通増えるのは難しく苦労するが、定員を超えるようになり「和みの海 2（セカンド）」を 3 年後に開所した。皆さんからは越智さんが出来たから出来るものではないとか、普通は 1 から 2 から始めるが、越智さんは 0 人から始めたねと言われる。乗りで始めたところもあるが、自分が知らない分だけあまり考えずに怖いもの知らずで始めた。最初の利用者も飛び込みで来て説明するとすぐ契約になり、1 人からスタートした。その人の名前にも、たまたま「和」がついていた。その人が仲の良い友達 2 人連れて来てあっという間にどんどん増えていった。



和みの海（本部）



和みの海2（セカンド）

2. ミュージック：たかとり救援基地復興隊「夢光る町神戸を」

3. ゲストコーナー（2）

障害者の就労継続支援B型の福祉事業所として現在行われている仕事の内容について、基本は企業からの下請け作業の内職仕事です。次にスーパーなどで販売される野菜の下処理として、ニンジンのひげを取ったりゴボウの根っこを取ったりしてきれいに整え、1袋何グラムと決められた量を測り袋に入れ、シールを貼る作業をしている。この作業は、普通は根気の必要な仕事でしんどく思われるが、障害のある人には向いていると思っている。少し仕事ができる人には計量を担当してもらっている。作業工程が多く適材適所に仕事を振り分けられるので、事業所に適した仕事である。デメリットは真夏など季節によって野菜が急激に減ったりすることで、仕事に大きな山谷が出来ることである。この仕事は1か所から受注しているが別の会社からも受注できればと思っている。

マンションの清掃の仕事を月2回行っている。ごみの日に回収後行う清掃で利用者3人と職員がついて責任をもってきれいに作業をしている。この仕事も今後越智さん自身が営業をして更に仕事を取ってきたいと思っている。また布を織ったり毛糸を入れたりする手芸用品のキット作りをしている。歯ブラシの箱を作りその箱に歯ブラシを入れる仕事もしている。これらの仕事のほとんどが前職で働いていた時に知り合った社長からいただいたもので、仕事がなくて困っている多くの事業所に比べ恵まれていると思っている。最初に社長からいただいた仕事は、クリップを挟んでいく極



チャレンジドショップ和っしょい

簡単な作業で、指に豆ができるほど毎日毎日同じ単純作業であった。越智さんは作業をしている人に、必ず一生懸命仕事をして納期に間に合わせて丁寧にやっていると必ず次の展開が開けてくる、即ちいつか和みの海がなければ発注者の方が困るようになり、和みの海を頼りにしてくれるようになるので頑張ろうと

言い続けてきた。今では和みの海がなければ困ると言ってくれるようになった。その会社は依頼先が信頼できることがわかり、和みの海以外の事業所にも発注しているようだ。しかし和みの海は仕事が早く正確であると言ってもらっている。正確に期限を守り、きっちり検品し間違いない作業をすることは、編集者としての仕事の経験が役立っていると思っている。編集は納期や校正が絶対で徹夜続きで厳守した。

仕事量に山谷が大きいためオリジナルな仕事として折り紙アクセサリー（授産製品）に取り組んだ。和みの海の製品として知ってもらえるものが欲しいと常々思っていた。クッキーやパン作り、裁縫などは取り組んでいるところが多く、個人的に和のもの（日本的なもの）が好きで、折り紙でアクセサリーが出来ないかと思いネットで調べるとあることがわかり、また就労支援で取り組んでいるところはなく、是非やりたいと思い地元の友達に聞くとその人の友達が作っていることがわかった。その人に来ていただいてワークショップを開き、まず職員が材料や手順などを教えてもらい、次に手先が器用でコツコツ作業の出来る利用者を中心に作り始めた。製品として出来るまでに1年間かかった。折り紙を折ったことのない人に最初大きな折り紙で練習してもらいある程度折れるようになって、小さいサイズで練習してもらった。中年の男性は最初何で折り紙を折ると文句を言っていた。このままではダメと思い、出来る人が作った商品を行商のように売り歩き、その結果を朝礼でいつも発表していた。そうすると男性はこれは仕事だと気付き、目の色が変わってきた。作業は分業しているので、男性には折り紙を折るのではなく、ペンチで金具を取り付けるところ、塗るところなどを手伝ってほしいと頼むと器用に一生懸命取り組んでくれている。アクセサリーであるため折り紙ではあるが固くする必要があるため、樹脂を塗り紫外線を当てて固めている。製品は一つずつ違う1点ものです。ネット販売を始めたので購入頂けます。男性がこの商品をつけていると、もてグッツと言われている。商品としては、イヤリング、ピアス、ネックレス、ブローチ、ネクタイピンなど沢山あります。外国の方が帰国時のお土産用として、また海外に出かける時の手土産に軽く小さいので最適です。

（オンラインショップ ハッピーパワー）

<https://happy-power.shop->

[pro.jp/?fbclid=IwAR2tI5KenMvX4kJPvIsI460dcl5ZGPmTy7a7xqk_zXJ2JrHPbYyZriPD82M](https://happy-power.shop-pro.jp/?fbclid=IwAR2tI5KenMvX4kJPvIsI460dcl5ZGPmTy7a7xqk_zXJ2JrHPbYyZriPD82M)



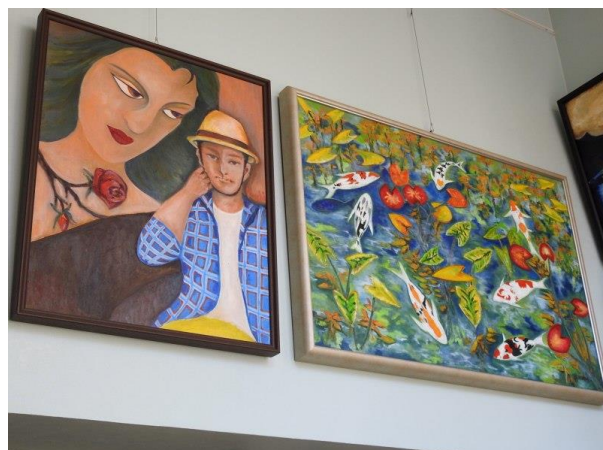
細かい手作業



折り紙アクセサリー完成品

和みの海、和みの海2（セカンド）の2つの事業所の他に、チャレンジショップ和っしょいが和みの海セカンドの斜め前にあり、ここは野菜の下処理の作業所として使っているが、場所がいいのでアクセサ

リーを置いたりリサイクル商品を置いたりして販売をしているので販売体験などにチャレンジできる場所として、また和みの海の広告場所として使っている。2か月に1回地域の人を巻き込みバザーをし、1月には餅つき大会を行い、ワークショップとして手作り品を持ち寄ったり、カフェ的にお茶を出したり、超初心者料理教室を開催、障害手帳のある人は300円、ない人は500円で参加でき、完成後は食事も出来るようになってきている。事業所に来ている人は親と同居の場合は問題ないが、そうではない人は菓子パンやポテトチップだけといった食生活が悪く、業者との提携で弁当を提供することで1日に1食でもまともに食べれるように考えている。親と同居の場合甘えから親に依存し料理はしていないので、何らかの理由で突然親がいなくなった場合どうすることも出来なくなる。そのような場合に対応できるよう料理教室を始めた。成果がでてきて、ある女性は教室で習った料理を毎回家に帰ってから作っているようだ。



越智さんの油絵（和みの海本部）

個々の利用者の障害に応じた対処について、障害のあるなしに関わらず楽しくなければ通うことは出来なくなるので、仕事の場合は生活があるので我慢して行っているが、事業所はそうではないので笑顔で来て笑顔で帰ってもらえるよう、楽しい雰囲気づくりを1番に考えている。しかし仕事であるからメリハリをつけ、作業中は集中してあまり私語をしないよう心掛けている。

最近何年も息子さんが引きこもり悩んでいたお母さん、お父さん、叔母さんが来られたが、今では当人は毎日通って来ており、ここが居場所になり親御さんも安心されている。一人で抱え込まず何らかの方法があるかもしれないので、和みの海でなくてもそういうところに見学に行くとか、区役所の障害者支援課か地域の支援センターへ相談に行くようにするといいと思います。

和っしょいという音頭を作ったのでチャレンジドショップ和っしょいでみんな集まり、楽しくわっしょいわっしょいやっている。越智さんが歌詞を作り友達が作曲した。これに振りを付け今度みんなで踊ろうと計画している。手作り市でバザーが行われている垂水の廉売市場の中で、6月6日になかよし市が開催され3時過ぎに集まり歌ったり踊ったりする計画がある。

4. こぼれた話、こぼれなかった話：児童生徒の多国籍化で学校が限界

1. 今学校現場では、日本語が十分に話せない児童や保護者への対応が限界に近づいています。県内の公立学校で学ぶ児童生徒のうち日本語指導が必要なのは、外国籍と、国際結婚などで日本国籍を持つ子どもを併せ、昨年度ですが1307人。都市部だけでなく、大規模な工場がある郊外の町でも目立つ。母

語も多様化して、中国語やベトナム語など以外に、アフガニスタンなどのパシュトゥー語やウイグル語など36言語と、この10年で2倍以上に増えた。

2. これらの児童生徒を支援する「多文化共生サポーター」が2年間派遣される県と地元市町との対応も、小さい自治体では特に、財政状況に加え、遠隔地で人材の確保自体が困難な場合も少なくなく、対応できる時間や回数に差が出てきている。

サポーター派遣の2年が過ぎて機関が切れると、児童生徒の担任の教員が、こまめに家庭訪問をしたり、漢字のプリントに振り仮名付けたり、電子辞書を片手に授業したり、英語が話せる教員が寄り添っています。

3. 加えて、「多文化共生サポーター」のなり手が不足し、少数言語の場合は大学の留学生や児童生徒の親族や知人らに相談するなど、難航している。もともと外国人が多い都市部に比べ、地方ではNPOや自助組織も少なく、学校任せになっていて、もう限界です。

教員の長時間勤務是正も指摘されているなか、外国人労働者の受け入れが大幅に拡大されてくるなか、今のままの体制ではとても持たないと、先行きが不安視されています。

5. 地域瓦版

6月2日(日)9時~16時、くつつ子まつり in 鉄人広場が開催されます。地元メーカーを中心とした約40社が参加し、婦人靴を中心に様々な商品がお安く販売されます。

6月21日(金)18時~22時、丸五アジア横丁ナイト屋台2019が開催されます。ミyunマー、中国、タイ、ベトナム、ネパール、インド、韓国など美味しい屋台が勢揃いします。



放送音声は、FMYYのHPおよび「ゆうかりに乾杯」のHPで視聴いただけます。

<https://toc117.jp/fmyy/?cat=51>

[http:// yukari-ni-kanpai.sakura.ne.jp/](http://yukari-ni-kanpai.sakura.ne.jp/)